

平成23年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

—若王子古墳の確認調査(1)—

佐藤 康二

1 はじめに

さきたま史跡の博物館では、埼玉古墳群の範囲を確定し、指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るために、行田市教育委員会の協力のもと、平成19、20年度に「埼玉古墳群範囲確認調査」を実施した。微地形の確認、古墳所在の伝承がある地点の調査、將軍山古墳の周堀の位置の確認等の成果があった(西口2009、西口・佐藤2010)。

平成21年度からは、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料を得るために、周辺遺跡の分布や立地・地形などの調査を目的とした「埼玉古墳群周辺確認調査」を開始した。平成21年度は埼玉古墳群の南西側の水田域を集中して調査した。ここは塚もしくは古墳の所在の記録が残る箇所であったが、調査の結果、古墳跡の痕跡は検出されなかった(佐藤2011)。

平成22年度は、昭和44年に撮影した航空写真に稻荷山古墳の失われた前方部や周堀とともに写っていた円墳跡の調査を行った。結果、ソイルマークと一致して3基の円墳の周堀を検出し、埼玉8～10号墳と名称を付した(佐藤2012)。

今回の周辺確認調査の事前検討のために古写真をチェックしていたところ、昭和23年にアメリカ軍が撮影した航空写真(第2図)に、前方後円墳と認められるソイルマークが認められた。これは若王子古墳の所在推定地とほぼ一致していた。このソイルマークを現在の地図にトレイスしたものが第3図である。この写真から、平成22年度周辺確認調査で実施した埼玉8～10号墳と同様、古墳周堀が遺存する可能性が高まったため、調査計画を立案し、考古学の専門家、地元有識者などで構成される史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成23年12月27日に了承された。なお、この「埼玉古墳群周辺確認調査」は国庫補助事業である。

2 若王子古墳について

若王子古墳は埼玉古墳群將軍山古墳の東約700mに所在していた古墳である。現在の地名は埼玉古墳群と同じく行田市埼玉となる。東流する旧忍川にほぼ平行して前方部を西側に向けて築造された前方後円墳である。埼玉古墳群稻荷山古墳の前方部同様、昭和9年頃に小針沼干拓のために墳丘は削平された。昭和5年に飛行機から撮影された写真には稻荷山古墳前方部や隣接する愛宕塚古墳とともに、前方後円墳の墳形がきれいに写されている(栗原1971)。

若王子古墳については、江戸時代から近年の研究まで網羅した詳しい研究がある(塩野2003・2004)。ここでは、近年の研究による若王子古墳の位置づけのみ簡単に記す。

杉崎茂樹氏は古地図を元に若王子古墳の位置や形態を示す地割や地目が存在することを発見し、墳丘の復元を行い、主軸長約103m、後円部径約52m等の数値を算出した。併せて出土遺物の検討を行い、築造年代については、須恵器はTK43～TK209型式に比定した(杉崎1986)。



第1図 周辺確認調査位置図



第2図 昭和23年撮影の航空写真
(1948年4月2日米軍撮影航空写真 国土地理院所蔵)



第3図 若王子古墳位置図(ソイルマーク及びトレンチを現在の地図にトレース)

地元の前玉神社に残されている天井石、間仕切石等から行田市若小玉古墳群中の八幡山古墳の石室に酷似していることも指摘されている(田中・小川1984)。

若王子古墳の東約250mからは3基の古墳が発見、調査されている。墳丘は存在しなかったが、推定墳丘径10~12mほどの小型のもので、若王子古墳群に含まれると考えられている。ただし出土土器から6世紀前半代に比定されており(瀧瀬1985)、若王子古墳の推定時期と異なることから関係は不明と言わざるを得ない。

3 平成23年度周辺確認調査

平成24年3月6日~22日の間の計7日間で調査を実施した。調査はいずれも人力により表土掘削を行い、遺構の有無及び地形確認、記録写真撮影、断面図作成、人力による埋め戻しを行った。なおトレンチ平面図は専門業者に委託してGPSデータ計測により測定した。

調査区については、第2図のとおり、第1区を前方部南側コーナー推定地、第2区を墳丘北側プラン推定地とした。調査区はいずれも民有地のため地権者の同意を得て調査を実施した。

(1) 第1区

第1区は若王子古墳の墳丘を削平後は水田として利用されてきたが、約10年前に畠地するために、盛土造成した箇所である。前方部コーナーが所在する可能性があることと、水田として利用されていないことから、調査後の耕作に影響が少ないと考え、選定した。

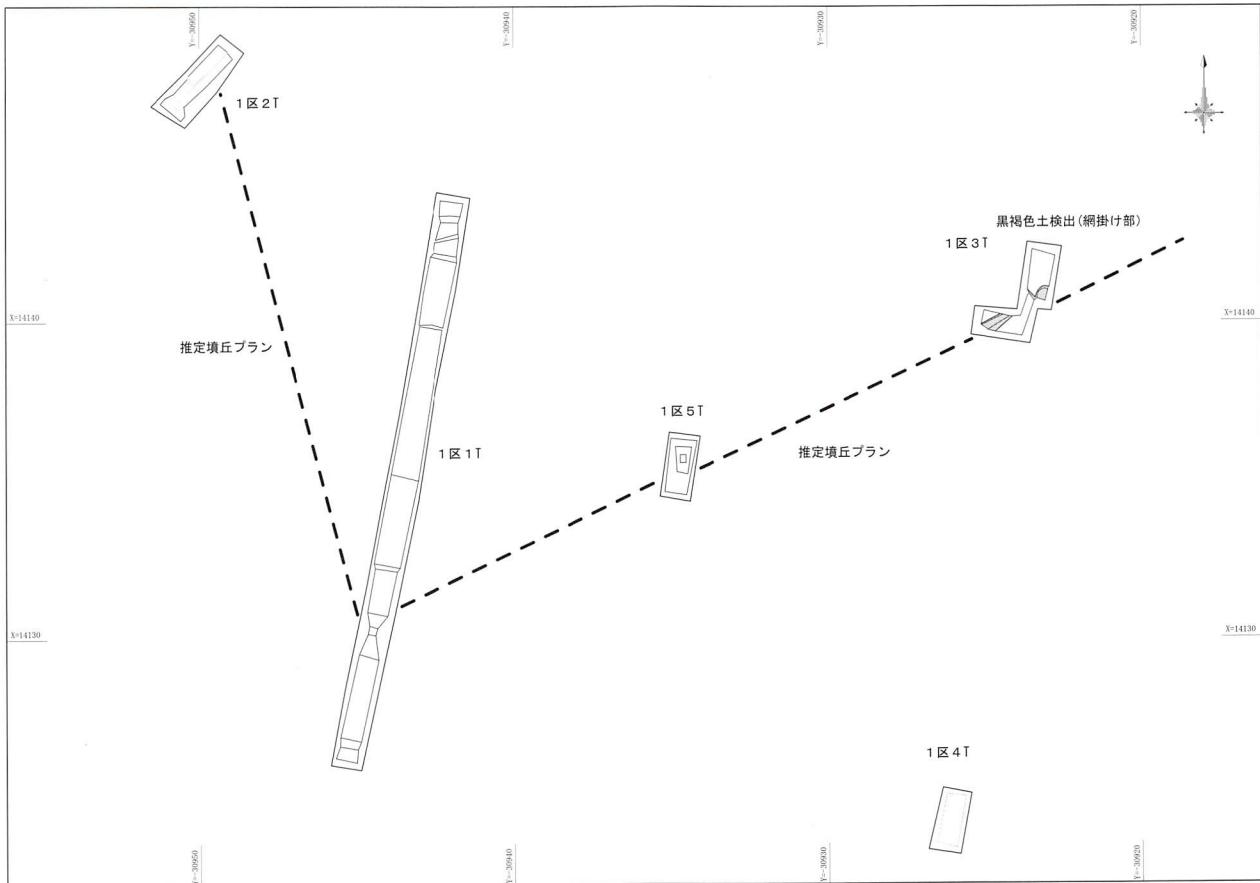
最初に着手したのは第1トレンチである。基本層序は上から現耕作土、盛土、旧水田耕作土、地山ローム層である。盛土にはズリ・ガラが転圧されており、ツルハシを使用しての調査は難航した。トレンチ南側の推定墳丘範囲でかろうじて地山ローム面を確認した。現況地表面下約1.3mの標高16.16mであった。しかし推定周堀範囲はズリ・ガラが分厚く堆積していたため、調査を断念した。

第2トレンチの耕作土、盛土、旧水田耕作土を除去したところ、標高16.23mで地山ローム面を検出した。精査したところ、ほぼフラットなローム面であり、周堀等のプランは検出されなかった。基本層序を確認するために一部掘り下げたところ、検出したローム面下7cmでは、色調が暗くなるいわゆる黒色帯と想定される土壤であった。

第3トレンチの耕作土、盛土、旧水田耕作土を除去したところ、標高16.2mで地山ローム面を検出。ローム面を精査したところ、深度4cmほどの堅緻な黒褐色土を覆土とする不定型な落ち込みが検出された。トレンチ範囲が狭く、判然としないが、水田起源の土壤ではないため古墳周堀の覆土の可能性がある。

第4トレンチはGL-80cmから路盤状の硬化面が存在したことから、調査を断念した。第5トレンチは第1と第3トレンチ間の推定プランの走る場所に選定したが、ズリの堆積が分厚く、標高16.08mまでズリが堆積することを確認し、調査を中止した。

以上が第1区の調査内容であり、確認面まで到達できた箇所はごく限られてしまった。ただし確認された地山ローム面は後述する第2区で検出されたローム面とほぼ同じ標高であることから、ズリ・ガラを撤去できれば、部分的には前方部コーナーを検出できる可能性がある。なおいずれのトレンチも地山ローム面の確認面である標高16.2m前後で湧水が始まった。



第4図 第1区トレーニチ配置図

(2) 第2区

第2区は現在も水田利用されている箇所である。したがって田植機等が落ち込まないように最小限の調査を行った。

ソイルマークから現地の測り込みを行い、第1トレーニチの設定後に調査に着手したところ、水田耕作土下、約20~30cmで地山ロームの確認面が検出された。地山ローム面は、墳丘ソイルマークとほぼ一致して遺存しており、周堀推定部は、確認面が現水田起源の灰色のシルト系土壤となり、明瞭な境目が検出された。

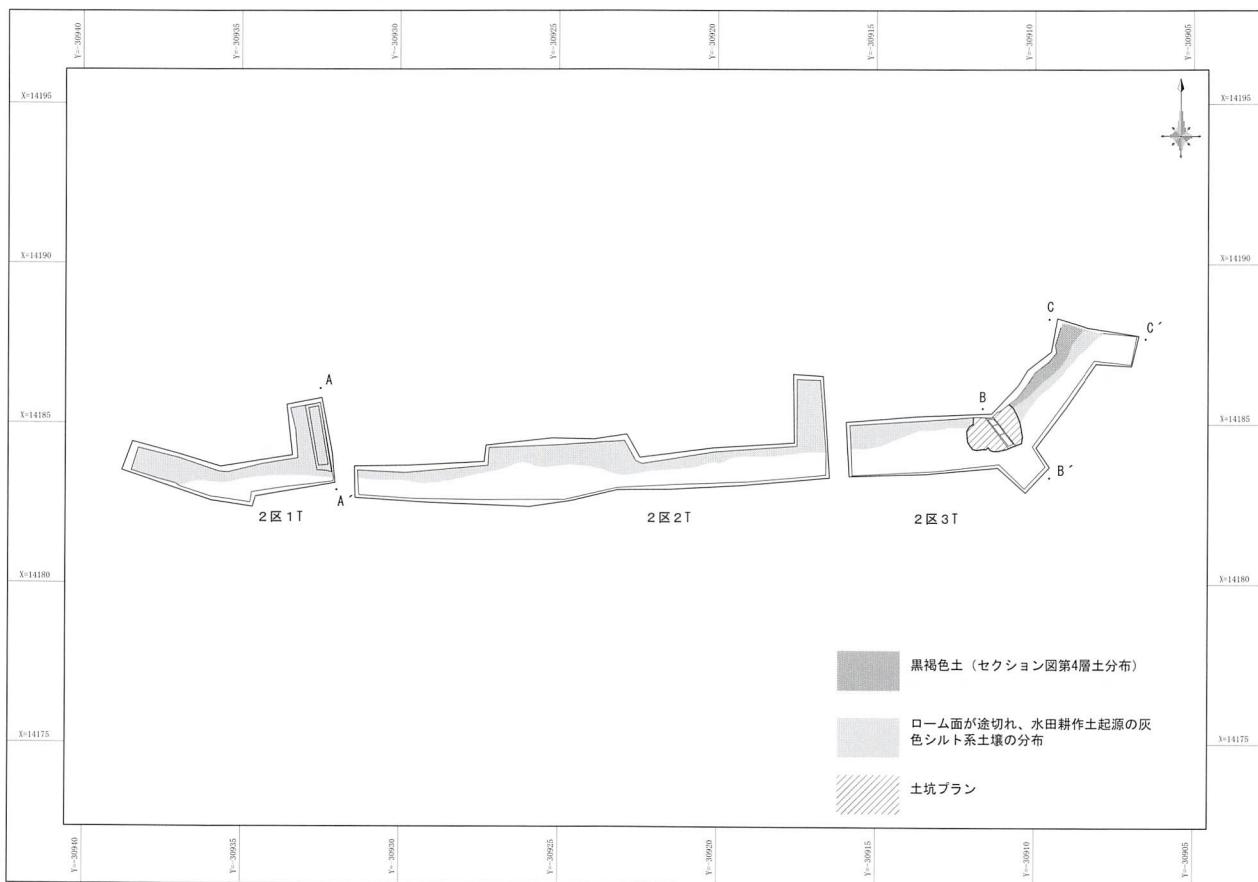
2区第3トレーニチでは、古墳プランを壊すような時期不詳の土坑があったものの、前方部から後円部へ移行するくびれ部も概ねソイルマーク通りに検出された。

各トレーニチに設定したサブトレーニチのセクションについては第6図のとおりだが、セクションAにおいては確認面下約30cmで湧水し、これ以上の深掘りは危険と判断したことから現水田起源の土壤下の古い覆土までは検出できなかった。しかしセクションCにおいては現水田起源の土壤下に堅緻な黒褐色土の覆土が堆積しており、周堀覆土と判断した。

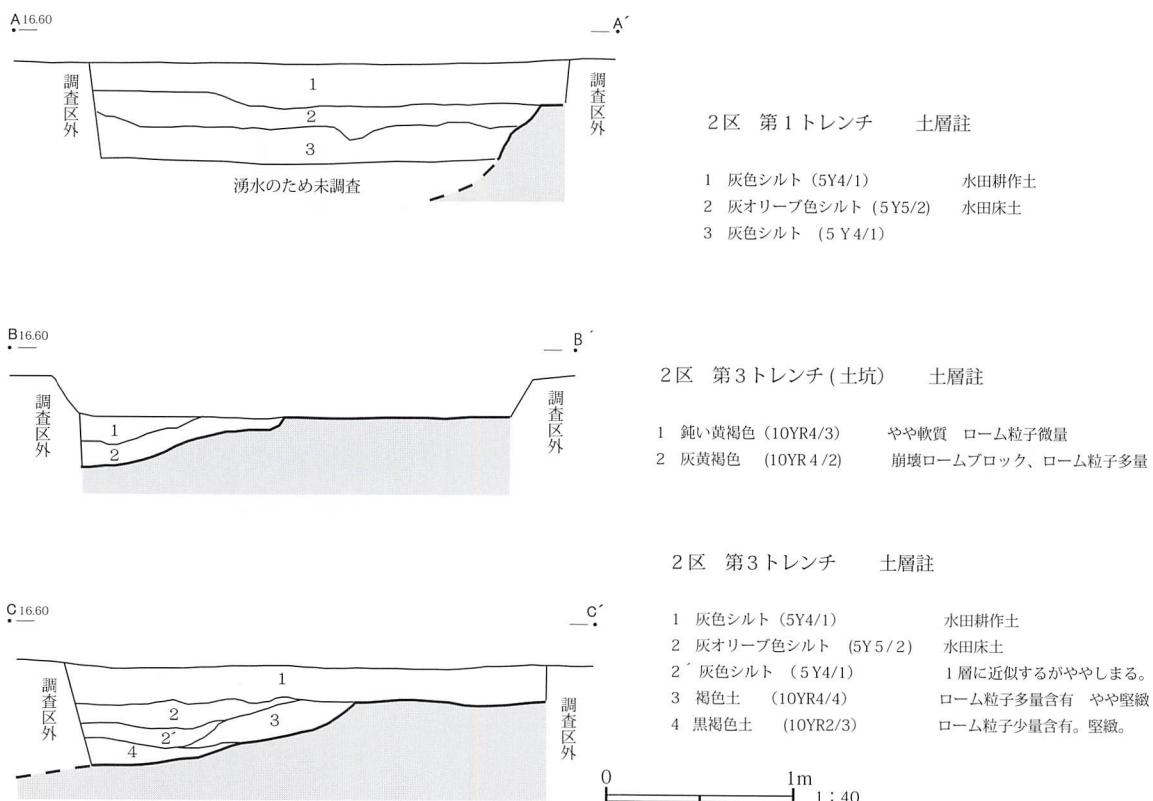
各トレーニチから近世以降の陶磁器片等が数片検出されたが、古墳時代の遺物は検出されなかった。

4 確認調査の成果と課題

若王子古墳は墳丘が消滅しておよそ80年の歳月が流れた。しかし現在においても墳丘プラン



第5図 第2区トレーニチ配置図



第6図 第2区セクション図

(周堀プラン)が遺存することが判明した。第1区については、埋立土が堅緻で、調査成果はあがらなかったが、確認された地山ローム面の標高は第2区とほぼ同じ数値であった。つまり最適な調査手法を選択すれば、前方部コーナー部のプラン検出は不可能ではないと思われる。

第2区については、昭和23年撮影の航空写真と一致して地山ローム面の境目を検出することができた。ただし周堀の上層覆土が現水田起源の土壤であることから、本格調査が実施された場合は修正が必要であることは言を待たない。今回、くびれ部周辺において、周堀下層に黒褐色土の堆積が認められたが、この覆土の検出と調査が必要である。

平成22年度周辺確認調査で実施した埼玉8～10号墳においては確認面標高16.5mで周堀は深度0.5m遺存し、愛宕通遺跡の小円墳においては確認面標高15.7mで周堀深度は0.7m遺存していた。微地形が不明な中、あくまで推測であるが、両者のほぼ中間地点に位置する若王子古墳(確認面標高16.2m)においても周堀は一定の深度が遺存している可能性が高いだろう。

若王子古墳の確認調査は今後も継続する予定である。民地のため、調査に制約が多いが、今後の調査目的は下記が挙げられる。

1 若王子古墳の遺存状況の把握、2 墳丘形態、規模、主軸方位等の把握、3 周堀の形態、規模の把握、4 出土遺物の時期検討(埴輪を伴うのか)、5 隣接する愛宕塚古墳の確認

これらが判明すれば、隣接する埼玉古墳群との関係や当該地域における前方後円墳の終焉を検討するための重要な基礎資料となろう。

引用・参考文献

- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 佐藤 康二 2011 「平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 佐藤 康二 2012 「平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第6号
- 栗原 文藏 1971 「埼玉古墳群の古航空写真」『埼玉考古』 第9号 埼玉考古学会
- 塩野 博 2003 「『北武八志』と清水雪翁の考古学－発掘された埼玉「若王子古墳」をめぐって－」 埼玉県立博物館紀要 28
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』 さきたま出版会
- 杉崎 茂樹 1986 「行田市若王子古墳について」『古代』 第82号 早稲田大学考古学会
- 田中正夫・小川良祐 1984 「各地域における最後の前方後円墳 東日本Ⅱ－埼玉古墳群周辺地域－」『古代学研究』 106 古代學研究會
- 瀧瀬 芳之 1985 『愛宕通遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第51集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

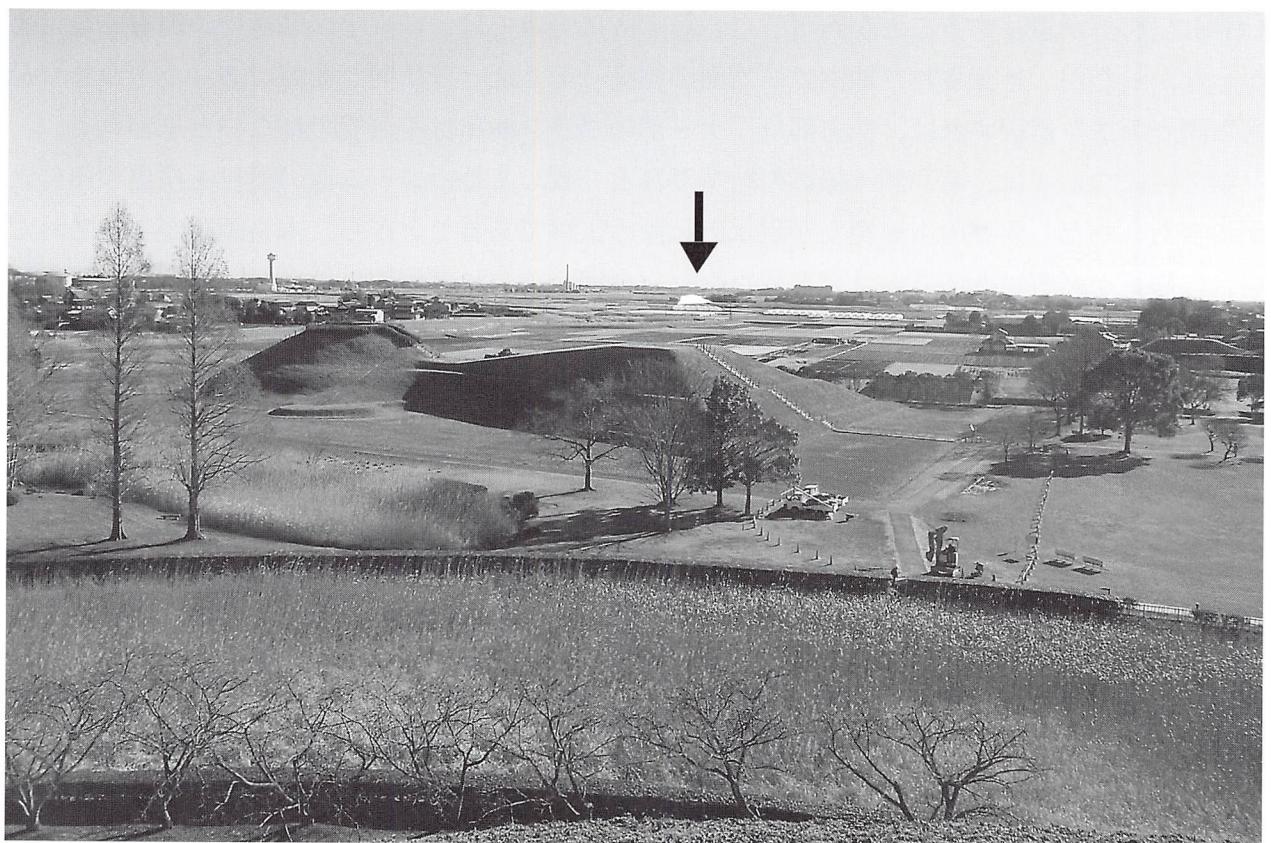


写真1 丸墓山古墳墳頂から(白抜き部は推定墳丘位置。手前は稻荷山古墳)



写真2 2区 調査風景(奥に見えるのは旧忍川堤防)



写真3 1区1T 調査風景
(造成土が厚く、ツルハシ使用)



写真4 1区1T
(手前にわずかにローム面が遺存)



写真5 1区1T 推定周堀箇所
(転圧されたズリがあり調査中止)



写真6 1区3T
(地山ローム面で、不定型な落ち込み検出)



写真7 1区2T
(地山ローム面検出)



写真8 GPS測量風景



写真9 2区 調査風景(トレンチ内の左側が墳丘下のローム層、右側が周堀覆土)



写真10 2区 全景



写真11 2区2T
(手前は周堀覆土、奥が墳丘下のローム層)



写真12 2区3T くびれ部周辺



写真13 2区3T セクションC-C'
(黒褐色覆土)